

錯綜するプロットの謎：フェミニズム批評から読む Lady Audley's Secret

松村, 豊子

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004591>

錯綜するプロットの謎：フェミニズム批評から 読む *Lady Audley's Secret*

松村豊子

1. 何故フェミニズム批評か

Lady Audley's Secret は1862年に出版された Mary Elizabeth Braddon の代表作で、1860年代に爆発的人気を誇った ‘The Sensation Novel’ の一つである。⁽¹⁾ Kathleen Tillotson は ‘The Sensation Novel’ を “the novel-with-a-secret” と定義し、本作品及びこれと同時期に出版された Wilkie Collins の *The Woman in White* (1859–60)、Dickens の *Great Expectations* (1860–61)、Mrs Henry Wood の *East Lynn* (1860–61) の四作品をこのジャンルの典型とみなしている。⁽²⁾ 大衆の人気を呼んだ理由の一つは、これらの作品の題材が当時新聞雑誌で ‘police report’ ‘court report’ として日々報道された、‘respectability’ の堅固な砦と誰もが信じて疑うことのない中産階級の醜聞事件——例えば、1857年の *The Matrimonial Causes Acts* の制定以来、離婚裁判は急増し、しかもその報告は庶民の関心の的となる——と重複したことである。⁽³⁾ しかし、文学批評の対象としては、この題材は破廉恥で煽情的すぎると考えられ、⁽⁴⁾ 長年 Dickens 文学の垂流すなわち推理小説として言及される以外、軽蔑すべき ‘sub-culture’ あるいは家庭内犯罪小説群として忘れ去られていた。‘The Sensation Novel’ 研究のパイオニアである W.C. Phillips の *Dickens, Read and Collins: Sensation Novelists* (1919) はこのあたりの批評事情を端的に物語っている。⁽⁵⁾ 従って、ポスト構造主義がフェミニズム批評の正当性を裏付け、‘The Sensation Novel’ が ‘dissident womanhood’ をテーマにしたジャンルと再定義されるまで、*Lady Audley's Secret* はしばしば ‘The Sensation Novel’ の原型とされながら、作者 Braddon の名前が彼女の文学上の ‘mentor’、Bulwer Lytton (Dickens 一派の一人) との関係で言及されるにとどまり、作品自体の文学的

価値について論じられることはなかった。⁽⁶⁾

ところで *Lady Audley's Secret* の再評価⁽⁷⁾ のきっかけを作ったのは、ヴィクトリア朝女性研究の第一人者 Elaine Showalter である。Showalter は “Family Secrets and Domestic Subversion: Rebellion in the Novels of the 1860s” (1978) で、‘The Sensation Novel’ の人気を文学現象と同時に社会現象としてとらえている。

[The] vogue of sensationalism in the 1860s is clearly a sociological as well as a literary phenomenon. … [It] is a mode which is responsive to a new situation, the other side of the tensions which give the decade its reputation for prudery and Podsnappery.⁽⁸⁾

Showalter がここで言う「新たな状況」を補足説明すると、女性たちがよき母、妻、娘といった父権中心の役割に不満を唱え、自ら創造できる世界をたとえ実現不可能ではあっても希求し始め、このことが作者及び読者双方の暗黙の了解事項になったことである。*Lady Audley's Secret* はこの典型的な例として紹介されている。Lady Audley は父親のアルコール好き、母親の精神病、夫の蒸発、そして、幼い息子の存在を隠し、天涯孤独の家庭教師になりすまし、40 歳も年が離れた大金持ちの男爵 Sir Audley の後妻の座に迎えられた「幸運」な女性である。しかし、結婚後は蒸発していた夫が突如彼女の眼前に出現し、死亡届けの偽造はおろか放火、殺人未遂まで犯し、過去を葬り去ろうとする。外見上は ‘a perfect lady’ の体裁を保ちながら、現実の貧困及び家庭崩壊をなんとか隠蔽しようと奔走する彼女はまさに ‘The Other Victorian’ である。Showalter は Lady Audley の性格づけを “a determined and resourceful woman with many secrets who set out to liberate herself from economic and emotional bondage”⁽⁹⁾ と分析しているが、家族との経済的感情的絆を極秘の内に断ち、新たな家族関係を模索した点、彼女は ‘The Sensation Novel’ のヒロインの模範である。*A Literature of Their Own* (1977) 及び *The Female Malady* (1985) でも、Showalter は Lady Audley の数々の一見奇怪な言動がいかに当時家庭内に幽閉状態にあった淑女全般に当てはまるか詳細に実証している。

Lady Audley's Secret の批評史に話を戻すと、作品論は Showalter の手

法に従い Lady Audley の秘密の社会性に焦点を当てるか、あるいは素人探偵 Robert Audley をそれに絡ませ推理小説として論じるかに二分している懸念がある。⁽¹⁰⁾ 後者の場合、Robert Audley の探偵としての未熟さが指摘されるばかりで、その要因である彼と Lady Audley の複雑な人間関係は無視されている。つまり、彼は彼女の秘密を暴く探偵の役を担いつつ、実質的には彼女の二人の夫、Sir Audley と George Talboys にそれぞれ信頼される甥 (Sir Audley に息子がなく、Robert Audley が孤児であることから、二人の関係は父子のそれであり、また Robert Audley は次期爵位継承者) であり、親友 (彼は George Talboys と Lady Audley こと Helen Talboys との間に生まれた少年の後見人) であり、彼女に対しては常に彼らの抑圧された心理状態を代弁する役割をも担っているのである。本稿では Lady Audley, Sir Audley, Robert Audley の三人の人間関係に焦点を当て、これを「沈黙する母」を媒介にした対立する父と息子という伝統的なプロットの一つのバリエーションととらえ、「沈黙する母」に権力志向が強い Lady Audley を設定することで、Braddon が従来の家族関係をどのように読み直したのか考えてみたい。

Narrative is, in sum, the most elaborate kind of attempt, on the part of the speaking subject, after syntactic competence, to situate his or her self among his or her desire and their taboos, that is at the interior of the oedipal triangle.⁽¹¹⁾

Julia Kristeva はこのように「語り」とエーディプスの三人関係について述べているが、本作品でも三人の関係はタブー視された 'the oedipal triangle' に基づいている。

仲睦まじい父母、互いに信頼の厚い父子。この絵にかいたような家族は、母と子の疑似近親相関が原因で結局は離散する。Lady Audley, Sir Audley, Robert Audley の三者にとって Audley Court は富と平和を象徴する楽園だったが、Lady Audley の重婚とそれを隠蔽しようとして犯した数々の罪が Sir Audley に知らされると、彼は Audley Court を閉鎖。Lady Audley はベルギーの精神病院に隔離、Sir Audley は実娘 Alicia の元へ転居、Robert Audley は George Talboys の妹 Clara と結婚し、別の地に新たな楽園 'a

fairy cottage' を構える。父から息子への世代交代とその危険な媒介となる母のモチーフは、本作品に限らずヴィクトリア朝の自伝的小説に度々見られる。Thackeray の *Henry Esmond* (1853) はこの種の小説では卓越しているのだが、本作品のユニークな点は従来「沈黙する母」として父権の確立を陰で支えたヒロインが、父権を自己の野心的願望を実現する一つの道具とみなし、徹頭徹尾愚弄することであろう。以下、Lady Audley のプロットがどのように Sir Audley を無力化するか、Robert Audley のプロットが不倫志向とそれをカモフラージュする 'Christian Duty' への覚醒に分裂していること、そして、これらの錯綜するプロットが作者の父権に対する強い不信感に根ざすことを実証したい。

2. オブジェクト化する Lady Audley のプロット

60 歳の Sir Audley は 23 歳の Lady Audley を溺愛しており、彼女の眼差し一つで彼女の意向を知り、望みを叶える程である。これは当時話題を呼んだ 'December and May Marriage' の典型だが、この種の結婚において、若い妻たちがしばしば性的欲求不満に陥ったことは周知のことである。Rhoda Broughton の 'The Sensation Novel' *Cometh Up as a Flower* (1867) では、ヒロインは老いた夫の肉体及び精神に対する嫌悪感を赤裸々に語り、それを克服した自分を自画自賛するというおまけまで付いている。Lady Audley が実際 Sir Audley の肉体を一体どのように感じていたかは一切言及がなく憶測するしかないが、Sir Audley が彼女の美しさに魅了され、彼女を神格化し、彼女の言葉を 'Gospel' として聞く程度に彼の愛情に報いていたのは確かである。しかし、一介の貧しい家庭教師だった Lucy Graham との再婚を Sir Audley に決意させ、結婚後も盲愛し続けさせたのは、彼女の肉体的魅力もさることながら、当時理想的な女性とされ、神話化さえしていた 'Child-Woman' の特質を彼女が完璧にマスターしていたことである。

Lady Audley の体型は "slim and fragil", 青い瞳は "soft and melting", 唇は "rosy", 鼻は "delicate", 首は "slender", 伏目がちの頭から首にかけての曲線は "graceful", 髪は豊かな金髪で、常にカールし、背後に日が射すと "pale halo" ができるほど魅力的である。勿論、手は "tiny" で "pretty white" である。これらはすべて生得的要素が強いが、彼女は女学校時代から

『美人年鑑』、イギリス及びフランスの文学作品を読み、男性の注目を集める女性のマナーを研究し、その習得に励んでいる。努力の結果、顔の表情には現実の不幸とは程遠い子供のような “innocence and candor” が漂い、気分は常に “light-hearted, happy, and contented” (p.5)。趣味も子供っぽく、読書や学問研究よりは社交好きを装い、せいぜい17歳にしか見えない。富と権力の象徴である Sir Audley に対しては特に注意を払い、月面のごとく ‘Child-Woman’ としてのみ振る舞い、これに気持ちが合わない時には薄暗い物陰に位置し、彼に表情を読まれないようにしている。つまり、Lady Audley は魅惑的な女性のマナーを完全に模倣し、Sir Audley のような男性の前では “the most beautiful object” になりきっているわけである。

Every evidence of womanly refinement was visible in the elegant chamber. My lady's piano was open, covered with scattered sheets of music and exquisitely-bound collections of scenas and fantasia which no master need have disdained to study. My lady's easel stood near the window, bearing witness to my lady's artistic talent, in the shape of a water-coloured sketch of the Court and gardens. My lady's fairy-like embroideries of lace and muslin, rainbow-hued silks, and delicately-tinted wools littered the luxurious apartment; while the looking-glasses, cunningly placed at angles and opposite corners by an artistic upholsterer, multiplied my lady's image, and in that image reflected the most beautiful object in the enchanted chamber. (p.294)

『白雪姫』の魔女は一枚の鏡に向かったが、Lady Audley は私室の隅々にまで鏡を据え、あらゆる角度からあらゆる姿の自画像を入念にチェックし、‘a perfect lady’ の名声を欲しいままにできたのである。美しさを表現しようとマニュアルを読み漁り、鏡の前で ‘an actress’ さながら演技練習を欠かさなかったにもかかわらず、読書嫌いの呑気さを装わなければならないとは、皮肉な話である。しかし、‘Child-Woman’ としての魅力が自然なものであると同時に、極めて人為的なものであることは、彼女が優れた ‘plotter’ であることと無関係ではない。

女性、特に男性に経済的依存をする女性が、鏡に映る自己の姿を基盤に自己形成してきたこと、また、その文学的影響については既に *The Madwoman in the Attic* (1979) で Sandra Gilbert と Susan Gubar が明らかにしている。しかし、他者である男性の嗜好に合わせて形成された自己とは、Gilbert と Gubar が主張するように「空白」「自己不在」と消極的な意味づけで終わらせていいのだろうか。⁽¹²⁾ 完全な模倣という行為を命令する、鏡に直接映らない自己は、模倣が完全であればある程抑圧され、鏡像に陶酔し内的空白に陥るところか、それに新たな意義付けをするのである。⁽¹³⁾ Lady Audley は決して自らの鏡像に陶酔していない。彼女は自らの鏡像が男性特に Sir Audley に及ぼす効果を狙う仕掛け人に徹している。逆に彼女の鏡像に陶酔するあまり内的空白に陥っているのは、彼女にこのような鏡像を強いた Sir Audley である。彼女は彼が溺愛するオブジェクトになることによって、彼の霊（実質的には仕掛人）となり、彼の権力を掌中におさめるのに成功したのである。実際、彼女は巧みに彼に Alicia の欠点を吹き込み、父と娘の仲を疎遠にする一方、Robert Audley (28 歳) と彼女の年齢が近いことから、彼の Audley Court 滞在はスキャンダルの種となりやすい等もっともらしい理由を Sir Audley に吹き込み、叔父と甥の仲をも冷やしている。

ところで、Lady Audley の実父が Sir Audley と同じくらい金持ちで権力があれば、彼女が罪を犯すことはなかったのであろうが、彼女の実父 Captain Maldon はアルコール浸りの貧しい退役海軍士官だった。そのせいか、母親は彼女を出産直後に ‘puerperal disease’ を患い、精神に異常をきたし、娘が娘と認識できないまま療養所で死亡。幼い時は乳母の元に預けられ、その後は大半女学校で寄宿生活を送ったが、彼女は女学校卒業と同時に 17 歳で、父親が金目当てで見つけた海軍士官 George Talboys と結婚。しかし、この結婚は夫に経済力と分別がなかったため一年余りしか続かず、長男誕生数日後に夫の蒸発をもって終わる。無一文に近い状態で、乳飲み子と放蕩癖のある父を抱え、彼女はピアノのレッスン等で数カ月間家計を支えたが、ある夜、父親が生活費を持ち出し酒代に当てたことをきっかけに、ついに父と息子を捨て、単身ロンドンへ出奔。Helen Talboys は一夜にして消え、天涯孤独の家庭教師 Lucy Graham が誕生したのである。“[She] could endure nothing; neither herself nor her surroundings.” (p.306) 彼女が淑女のマニユアル——視覚的美しさが財力地位共に最高の男性との結婚を可能にする

——を信じ込んでいたため、また、我身の美しさを自認していたため、‘a deserted wife’の貧困と屈辱は一層耐えがたかったのだ。親子程年の離れた Sir Audley との結婚は、‘an exploited daughter’ ‘a deserted wife’ という現実から逃避した彼女の白昼夢の実現でもあったわけだ。彼女は重婚そしてその後の隠蔽工作という淑女にあるまじき行為に走った動機を、母親から遺伝した「狂気」で片づけているが、離婚が事実上不可能だった状況において、これは個人の幸福と利益を主張する極自然なサヴァイバル行為ではないだろうか。Marianne Hirsch は Freud の “Family Romance” を読み直し、‘Family Romance’ が基本的には現実の家族関係から解放された個人の願望実現の神話だと述べているが、⁽¹⁴⁾ Lucy Graham は Helen Maldon Talboys のまさに ‘Family Romance’ だったと言えよう。

ここで当時の結婚成立事情について簡単に説明すると、驚くべきことに、重婚は宗教的・道徳的には立派な罪だったが、法律上処罰の拘束力はなかった。婚姻成立事情がイングランド、スコットランド、アイルランド及び植民地各地で異なっていたため、重婚をめぐる裁判が当時多発していた。1857年の ‘The Case of Yelverton’ はこの混乱を物語る有名な例である。⁽¹⁵⁾ 1865年には ‘A Royal Commission’ が設立され、各地の婚姻成立事情は正に乗り出したが、実質的効果は今世紀に入るまで望めなかった。⁽¹⁶⁾ 1867年の委員会報告によると、大半の重婚者は Lady Audley の本人死亡の偽装とは逆に、配偶者の自殺あるいは事故死届けを偽造していたそうだ。⁽¹⁷⁾ 彼女の重婚はこの奇怪な時事事情を反映した点でもセンセーショナルだったわけだが、彼女の罪が法的処罰を免れた、異国の精神病院に軟禁という形をとるのも根拠のない話ではなかったのである。ちなみに Wilkie Collins の 1860年代の作品はこのあたりの婚姻成立事情の混乱をベースにしている。

第三卷第三章 “My Lady Tells the Truth” は本作品のクライマックスだが、ここで Lady Audley は過去の秘密を告白する。彼女の告白で注目すべきことは、彼女が犯罪者としてではなく、経済力を持つべき父親あるいは夫に疎外、虐待された淑女がしばしば自己防衛の一手段として変身した「狂女」として自己分析していることである。“I AM MAD! because my intellect is a little way upon the wrong side of that narrow boundary-line between sanity and insanity.” (p.346) そして、詫びれることなく、彼女はこの狂気が祖母から母、母から娘へ受け継がれた唯一の遺産だと堂々と釈明する。

‘respectability’ の尺度では淑女の処女性と無垢は絶対視されていたので、淑女の犯罪は性的欲求と同じく不可能と思われていた。⁽¹⁸⁾ そこで彼女はこの社会通念を逆手に取って、自己弁護できたのである。⁽¹⁹⁾ しかし、Showalter の指摘どおり、彼女の本当の秘密は彼女が正気だったことである。⁽²⁰⁾ 彼女が主張し、一般に信じられていた ‘puerperal disease’ による精神障害で彼女の行為の説明を済ますには、一連の犯罪の形で表面化する彼女の抑圧された自己はあまりに強烈すぎる。

では何故作者は Lady Audley に「狂女」の自己弁護を許したのか。その理由は、視覚的には完璧な淑女であり、その悪行も淑女にならんがためであった Lady Audley に「狂女」以外のプロットを準備することができなかったためであろう。Peter Brooks は 19 世紀小説のプロットの主要な動機付けは ‘desire’ ‘ambition’ であると言い、野心満々の動的ヒーローのプロットに対し、ヒロインのプロットを *Jane Eyre* (1848) 等を例に挙げ、次のように定義している。

The female plot is not unrelated, but it takes a more complex stance toward ambition, the formation of an inner drive toward the assertion of selfhood in resistance to the overt and violating male plots of ambition, a counter-dynamic which, from the prototype *Clarrissa* on to *Jane Eyre* and *To the Lighthouse*, is only superficial passive, and in fact a reinterpretation of the vectors of plot.⁽²¹⁾

Brooks の指摘はヒロインが「欲望」「野心」の餌食となりがちで、所謂「家庭の天使」型であることを想定してのことだが、この場合は確かにヒロインは一見受動的だが、モラル面では実に支配的で、‘moral dignity’ の確立を目指している。クライマックスでは罪深いヒーローに罪の告白を強い、改心さえさせることもある程だ。Dickens の「家庭の天使」はこの典型的な例である。完璧な淑女になることを目指し、そのマニュアルに忠実に従った Lady Audley が、Brooks が指摘する ‘female plot’ を知らないはずはなく、彼女は淑女にあるまじき自己の行為にどのような内的位置づけをしただいか戸惑っている。

My worst wickednesses have been the result of wild impulses, and not of deeply-laid plots. I am not like the women I have read of, who have lain night after night in the horrible dark and stillness, planning out treacherous deeds, and arranging every circumstance of an appointed crime. I wonder whether they suffered——those women——whether they ever suffered as——. …I can't plot horrible things. …my brain isn't strong enough, or I'm not wicked enough, or brave enough. (pp.297-8)

彼女は男性の理想となる「天使」でなければ、その理想を一切裏切る（一般的には容姿の奇怪さを伴った）「妖怪」かという、文学に描かれてきた女性像の二項対立を引き合いに出し、既成の判断基準がない故に、自己の 'wild impulses' を「狂気」という言葉で片づけたのである。しかし、彼女自身の自己認識が「淑女に犯罪は不可能」という社会通念に歪められ、その輪郭が漠然としていることは否定できない。

ところで、Braddon は Lady Audley をヒロインにするに際し、「天使」「妖怪」「狂女」の三者択一の常套手段を巧妙に読替え、「天使」のプロットを 'moral dignity' ではなく 'ambition' で動機付け、「天使」のプロットの虚構性を暴露すると同時にそれを強要し崇拝する男性側の愚かな傲慢さをも諷刺している。Lady Audley が告白する現実に耐えられず、事の処理を Robert Audley に一任する Sir Audley。彼女の存在そのものを「狂気」として、暗黙の内に葬り去ろうとする Robert Audley。彼らの狼狽と混乱は「天使」のプロットの神話性を如実に表しているのではないだろうか。Marianne Hirsch は Brooks の 'female plot' 論を不服とし、'female plot' における権力志向（女性の場合には性的欲望の影は薄い）の重要性を力説している。

Her plots, if they are to have any import, must, like the boy's, revolve around the males in the family who hold the keys to power and ambition.⁽²²⁾

Lady Audley のプロットは、彼女が終始淑女であり続けること、また彼女の犯罪が「狂女」のそれで片づけられることから Brooks の言う 'female plot'

——狂気が母から娘への遺伝ということで、この点は一層強調される——の様相を一応呈しているが、実質的には Hirsch の主張どおり ‘male plot’ と同質の起動力を供え、効果を挙げている。

3. 拡散する Robert Audley のプロット

Robert Audley はロンドンの Temple に部屋を借りる法廷弁護士だが仕事をしたことはなく、不道徳とされたフランス小説を愛読し、年給 400 ポンドで怠惰な生活をする優柔不断なイギリス紳士らしくない紳士である。叔母の Lady Audley に恋をしているかと思うと、George Talboys の失踪を執拗に追求した結果、彼女が George を殺害したと思い込み、モノマニアになったのではないかと自己懷疑に陥った末、突如 George の妹 Clara に ‘moral dignity’ を求め、最終的には Clara と結婚する。つまり、彼は Lady Audley の魅力とエネルギーを素直に反映する人物として設定されていて、彼の拡散するプロットは “a reinterpretation of [Lady Audley’s] plot” になっている。勿論、二人の関係の基盤は彼の彼女に対する恋愛感情にあり、これは George の失踪を境に複雑な方法で表現される。

Lady Audley が “the most beautiful object” として若い男性の崇拜者が多いこと、また、これを Sir Audley が嫉妬するのではなく、彼女の価値が社会的に容認されたことと解釈するので、Robert Audley の一目惚れに特別問題は無い。彼は Lady Audley が George Talboys の死亡したはずの妻 Helen Talboys とは知らず、初めて彼女を垣間見た時から恋に落ちたことを George Talboys に語っている。

But, for once in his life, Robert was almost enthusiastic.

“She’s the prettiest little creature you ever saw in your life, George,” he cried, when the carriage had driven off and he returned to his friend. “Such blue eyes, such ringlets, such a ravishing smile, such a fairy-like bonnet—all of a tremble with heartease and dewy spangles, shining out of a cloud of gauze. George Talboys, I feel like the hero of a French novel, I am falling in love with my aunt.”
(p.56)

Robert Audley は手放して Lady Audley の美しさの虜になったことを表明しているが、この幾分興奮しすぎた印象は、George Talboys が Audley Court で姿を消した直後には彼自身にも信じられない真剣な恋愛感情として認識されている。“Bob—otherwise Robert Audley, this sort of thing will never do: you are falling over head and ears in love with your aunt.” (p.84) 彼を George Talboys 失踪の謎究明に駆り立てたのは、友人への忠義心ばかりでなく、明らかに恋する彼女の傍らにいて、彼女のことを知りたかったからである。

互いに父子の情愛で結ばれていると公認する叔父と甥が同一の女性を愛するとは、‘respectability’ を誇ったヴィクトリア朝小説ではタブーの中のタブーだったようで、‘respectability’ の裏をかいた本作品でも Robert Audley は疑似探偵として心ならずも Lady Audley に自らの不倫志向を打ち消している。

“You have no sentimental nonsense, no silly infatuation, borrowed from Balzac, or Dumas *films*, to fear from me. The benches of the Inner Temple will tell you that Robert Audley is troubled with none of the epidemics whose outward signs are turned-down collars and Byronic neckties.” (p.139)

Lady Audley は淑女として彼の言葉を文字どおり受け取ったのだが、彼の言動は George Talboys 失踪の謎を究明し、彼女を追放するという大義名分とは裏腹に彼女への執着心を露にしている。無意識の世界を象徴する夢では、彼にとって彼女は ‘a bewitching siren’ であり、現実には ‘a childish, helpless, babyfied little creature’ (p.138) である。そして、彼女の悪を追求することで彼の恋心が冷めるように仕組まれる物語の展開でも、秘密の暴露をめぐる二人の駆け引きが密談の形で行われ、しかも、必要以上にその時間が長く、話の内容も濃い。二人の密談を頻繁に目にする機会が多かった Alicia が、二人の関係を「誤解」するのも当然である。“‘He is in love with my step-mother’s wax-doll beauty,’ thought Alicia, ‘and it is for her sake he has become such a disconsolate object. He’s just the sort of person to fall in love with his aunt.’” (p.263) 作者は Alicia の誤解を介して読者

に彼の真意を暗示しているのだ。

Robert Audley の拡散するプロットの基調音に Lady Audley への不倫志向があることを知れば、タブーへの直接的言及を避けたい作者が、彼が彼女への愛を自覚したとたん、'Christian Duty' への覚醒という常套的プロットをカモフラージュとして導入した理由も自ずと明らかだろう。George Talboys は極めて彼に都合よく失踪し、彼女を追い回す彼に大義名分を与え、その後、彼女の秘密を前に追跡を躊躇すると、彼女の意思と権力欲の強さに対抗できる Clara Talboys が登場し、彼の「危険」な愛に終止符を打つ。最終的に 'fairy cottage' へ行き着く Robert Audley と Clara Talboys の恋愛関係に説得力が欠けるのは、それが彼と Lady Audley との関係の二番煎じに他ならないからである。Clara Talboys は結局彼の叔母に対する思いを軌道修正する、道徳的存在にすぎない。

Marianne Hirsch は 'ambition' 'desire' で動機付けられたヒロインのプロットには、彼女が父権を掌中にしたいことで、必ず近親相姦の人間関係が付きまとうと言っているが、⁽²³⁾ これをヒロインのプロットに左右されるヒーローのプロットに当てはめても何ら支障はないだろう。否、ヒロインの権力志向が性的欲望を枯渇させる程強い本作品のような場合には、性的錯綜はヒーローのプロットにより一層色濃く反映するのではないだろうか。Sir Audley が Robert Audley と Lady Audley の「密談」に気付きながら、二人の関係を爵位継承者と彼の 'dependent' としてしか認識しようとしないうちは、彼自身も甥の若さを自らの老いの隠れ蓑として、無意識のうちであろうが、利用しているのである。'the oedipal triangle' が 'respectability' という道徳観で歪められていなければ、この「沈黙する父」がどのような反応を示したのか、又、「息子」に心の救済を求められた Clara Talboys がどのような女性に変貌するのか、興味あるところである。

4. 母親の不在

Lady Audley 及び Robert Audley の錯綜するプロットに欠けているのは、繰り返すまでもなく、'moral dignity' を確立できる「家庭の天使」即ち家族の心身の安全と幸福のために彼らを精神的に導き、自己犠牲をも厭わない母性豊かな母親の存在である。一攫千金を狙い、オーストラリアへ密かに出奔し

た George Talboys が心の支えにしたのは、聖母子像にイコン化された妻 Helen と息子 George の姿であった。“[A] girl whose heart is as true as the light of heaven” (p.17) “[My] little girl asleep, with her baby in her arms” (p.18) そして、Robert Audley は病に臥す Sir Audley を熱心に看病する Lady Audley を “a mediaeval saint” のイメージでとらえている。

Lady Audley, with her disordered hair in a pale haze of yellow gold about her thoughtful face, the flowing lines of her soft muslin dressing-gown falling in straight folds to her feet, and clasped at the waist by a narrow circlet of agate links, might have served as a model for a mediaeval saint, in one of the tiny chapels hidden away in the nooks and corners of a grey old cathedral, unchanged by Reformation or Cromwell.(p.216)

George Talboys と Robert Audley は Lady Audley を聖母のイメージでとらえているが、本作品ではこれが彼らの思い込みにすぎない虚像になっている。そして、この作品の一つの特徴は Lady Audley に限らず女性の登場人物たち（周辺の人物を含めて）がこぞって理想化された女性像の虚構性を暴きだしていることである。以下、作品から読み取れる母性不在事情を三点挙げたい。

(a) 出産に伴う母体の危険

Lady Audley の母親は ‘puerperal disease’ が原因で産後まもなく精神障害をおこした。Showalter の *The Female Malady* によると、淑女たちは妻あるいは母親の勤めを怠る口実に、しばしば男性が関与できない出産に関係する病気を使ったそうだが、⁽²⁴⁾ 医学や衛生学が今日のように進歩しておらず、出産に関する知識も浅かった（避妊用具は巷で簡単に入手できたのだが）当時、出産は実際女性の命がけの仕事の一つだった。妊娠時の病気、分娩中の感染と内蔵器官の損傷、出産後の病等、エドワード・ショーターの『女の体の歴史』には詳細に女性特有の ‘puerperal disease’ が説明されている。⁽²⁵⁾ Lady Audley は出産直後にこの病を危うく免れたと言っているが、この時期

に夫 George Talboys が分別なく出奔したことが、彼女にとって許し難い行為だったことは十分納得できる。Braddon 自身は Lady Audley 同様心身共に気丈だったようで、妊娠時も出産後もいつもと変わらぬペースで著作業に励んだようだが、彼女がこの種の不幸に見舞われた女性に深い同情をよせたとしても不思議ではない。

(b) 育児の経済的負担

中産階級では子供が生まれると乳母を、少し成長すると家庭教師を雇い養育及び教育を任せるのがステイタス・シンボルだったが、この費用がない場合はどうか。夫に去られた Helen Talboys は子供を他人に預け、自らその費用を捻出するために家庭教師としてピアノのレッスンをした。しかし、経済状態がこれより悪化し、子供を孤児院、親類宅、路上に置き去りにするか、あるいは売るより他なかった母親も少なからずいたのである。当時生き別れ、死別を問わず、孤児となった子供たちが多数カナダ等の植民地へ労働力として売られたことは周知のことである。⁽²⁶⁾ Lady Audley が死亡偽造報告をする際、彼女の身代わりとして埋葬された娘は、実母に埋葬料節約のために売られたのである。生活に困った Helen Talboys が息子を捨てたのは例外的なことではなかったのだ。彼女が主張するように、完璧な淑女即ち “the most beautiful object” であるためには経済的支援が必要だったのだ。賢明な Clara Talboys が淑女の道を踏み誤らないために、怠惰な Robert Audley が正業に励み、新居を購入するまで結婚しないのも当然であろう。

(c) 母親の代行をする娘の神話

Dickens の小説では母親のいない娘はほぼ例外なく自主的に母親の代行を立派にこなしている。しかし、ここに登場する娘たちはこれが神話にすぎないことを立証している。Helen Maldon は母親が隔離された狂女だと知ると、母親の代行ではなく、母親とは違う生き方を求め、結婚に夢をかけたが、Alicia Audley と Clara Talboys もまた亡き母親の代行をするには不向きな性向を呈している。

Miss Alicia had reigned supreme in her father's house since her earliest childhood, and had carried the keys, and jingled them in the

pockets of her silk aprons, and lost them in the shrubbery, and dropped them into the pond, and given all the manner of trouble about them from the hour in which she entered her teens, and had on that account deluded herself into the sincere belief that the whole of that period she had been keeping house. (p.4)

Alicia Audley は Agnes Wakefield あるいは Esther Summerson よろしく母親代わりを努めるが、実務能力が欠落していたため、彼女の自己満足で終わっている。娘が母親代わりを努めることは、所詮、子供の遊びの一つだというのが作者のメッセージだろうか。また、Helen Maldon Talboys ほど過激ではないが、Clara Talboys は娘の独立心を明確に表明している。Talboys 兄妹の父親は ‘respectability’ の規範を遵守し、無一文の娘と結婚した息子を絶縁し、彼の失踪にも無関心な態度を崩さない。この四角四面の父親に代わり、失踪した兄の謎解明に際し、母権でなく父権の代行を試みるのが Clara Talboys である。父親の傍らでは顔の表情一つ変えないオブジェクトであることに徹しているが、彼の支配が及ばない所では、彼女の言動は優柔不断な Robert Audley とは対照的に旺盛な自立の精神と情熱、そして、権力志向を表している。

“I do ask you. I ask you to avenge my brother’s untimely death. Will you do so? Yes or No?”

“What if I answer no?”

“Then I will do it myself. ……I myself will follow up the clue to this mystery; I will find this woman —yes, though you refuse to tell me in what part of England my brother disappeared. ……I am of age; my own mistress; rich, for I have money left me by one of my aunts; I shall be able to employ those who will help me in my search, and I will make it to their interest to serve me well.” (p.199)

Lady Audley は貧しかったので “the most beautiful object” になり、権力ある男性に経済的に依存しなければならなかったが、自由にできるお金がある Clara Talboys にその必要はなかった。Alicia Audley もまたしかりであ

る。彼女たちにとって、父権は利用価値こそあるが、それを亡き母親に代わり陰で支え、絶対視するほどの価値はもはやなかったのである。1860年代後半以降、中産階級の出生率は低下し始めるが、母性崇拜はおろか父権の確立まで危ぶまれる状況ではこれも当然の成り行きではないだろうか。

このように考えると、母親の不在は権力志向の女性たちに最も活動しやすい状況を提供したが、女性の本質を聖母像にイコン化された母性愛に求めた男性たちは戸惑うばかりであった。彼らの反応で興味深いことは、“anywhere out of England” (p.47) と *The Bridge of Sighs* の有名な一節をもじり、イギリスを後にするのが George Talboys 一人ではないことである。*The Woman in White* の Hartwright は中南米へ、*Great Expectations* の Pip はエジプトへと、それぞれ George Talboys 同様処女性と女性らしさの象徴とされた ‘The Woman in White’ に翻弄され、⁽²⁷⁾ 文明化された楽園であったはずのイングランドが実は「荒野」と変わらないことを知り、失意のうちに祖国を去る。

Lady Audley's Secret はじめこれらの作品では、ヒーローの期待がことごとく裏切られるように、プロットは読者の期待の裏をかき、謎に富み、錯綜する。この主たる原因は、作品の背景となる中産階級の構造的欠陥が内部告発の形で表面化せざるを得ない程深刻化していたことだろう。T. Boyle の次のコメントは ‘The Sensation Novel’ の社会的ヴィジョンを的確に把握しているが、「裂け目」は誰の目にも明らかだったのだ。

Everywhere in the period one finds a kind of double vision; on the one hand, a confident assertion of a perfectly seamless system in which everything is in its place; on the other, an absolute terror at the prospect of discovering rents in the fabric of the system's internal logic.⁽²⁸⁾

Lady Audley's Secret はこの ‘double vision’ を素直に反映した小説であり、リアリズム全盛のヴィクトリア朝小説としては珍しく、構造上の一貫性を欠き、芸術の完成度の点では劣るが、プロットはポスト構造主義批評が適用できる程錯綜する。謎また謎の ‘The Sensation Novel’ を読む醍醐味は、幾

重にも錯綜するプロットを紐解き、その意味づけを多視的に吟味できることである。

Text: Mary E. Braddon, *Lady Audley's Secret* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1987).

《注》

- (1) *Lady Audley's Secret* は当初 *Robin Goodfellow* 誌に 1861 年 6 月から月刊シリーズで連載されるはずだったが、この雑誌が経営難から同年 9 月に廃刊となったため、新に翌年 1 月から 12 月にかけて *Sixpenny Magazine* 誌で発表された。このシリーズが人気を呼び、シリーズ完結を待たず、三巻本として出版された。これは 1 年で 8 版を重ね、出版者はその利潤で別荘を購入してきたそうだ。また、1863 年には再度 *London Magazine* 誌にシリーズ発表された。
- (2) Kathleen Tillotson, "The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties" introduction to Wilkie Collins, *The Woman in White* (Boston: Mass, 1969) 15.
- (3) Jeanne Fahnestock, "Bigamy: Rise and Fall of a Convention" *Nineteenth-Century Fiction* 36 (1981): 47-71.
Patrick Brantlinger, "What is Sensational about the Sensation Novel?" *Nineteenth-Century Fiction* 37 (1982): 1-28.
Thomas Boyle, *Black Swine in the Sewers of Hampstead* (London: Viking Press, 1989).
- (4) Margaret Oliphant, "Sensation Novels" *Blackwood's* 91 (1862): 464-84.
Dean Henry Mansel, "Sensation Novels" *Quarterly Review* 133 (1863): 481-514.
W.F. Rae, "Sensation Novelists: Miss Braddon" *North British Review* 43 (1865): 180-204.
- (5) Walter C. Phillips, *Dickens, Reade, and Collins: Sensation Novelists* (New York: Columbia Univ. Press, 1919).
Phillips は 'Sensation Novelists' を Dickens を中心にした文学サークルと考えているため、Braddon あるいは Mrs Wood への言及はほとんどない。しかし、'low culture' として無視されていた 'The Sensation Novel' を当時流行していた推理小説として正当な文学批評の対象とした功績は大きい。
- (6) Tillotson でさえ *Lady Audley's Secret* を 'The Sensation Novel' の原型と言いつつ、フェミニズム批評の知識がなかったせいか、探偵 Robert Audley の曖昧な性格づけにのみ注目し、これが作品の質を低下させていると述べている。
- (7) 大衆の圧倒的な支持を得ながら、今日まで批評価値がある作品と見なされた事がなかったため、「再評価」と呼ぶのは抵抗があるが、近年再版されるようになったので「再評価」と呼ぶことにした。
- (8) Elaine Showalter, "Family Secrets and Domestic Subversion: Rebellion in the Novels of the 1860s" *The Victorian Family: Structures and Stresses* ed. A. Wohl (London, 1978) 103.

- (9) *Ibid.* 111.
- (10) *Lady Audley's Secret* の作品論として以下の図書を参照。
 Elaine Showalter, *A Literature of Their Own* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1977) Chap.6.
 Winifred Hughes, *The Maniac in the Cellar* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1980) Chap.5.
 Nina Auerbach, *Women and the Demon* (Boston: Harvard Univ. Press, 1982) 64-108.
 Thomas Boyle Chap.14.
 Lyn Pykett, *The Sensation Novel* (Plymouth: Northcote House Publishers, 1994) Chap.3.
- (11) Julia Kristeva, *Powers of Horror: An Essay on Abjection*, trans. Leon Roudiez (New York: Columbia Univ. Press, 1982) 165.
- (12) サンドラ・ギルバート/スーザン・グーバー共著『屋根裏の狂女』山田晴子/園田美和子共訳(朝日出版社, 1986) 第2章。
- (13) 多田智満子『鏡のテオーリア』(大和書房, 1977) には, 鏡の効用が心理学, 社会学の視点から詳細に述べられている。
- (14) Marianne Hirsch, *The Mother/Daughter Plot* (Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1989) Chap.1.
- (15) Fahnestock 58-66.
- (16) J.B. Kinnear, "The Marriage Laws of England and Scotland" *Contemporary Review* 7 (1868): 208-27.
- (17) Fahnestock 61.
- (18) Boyle Chap.11.

淑女の犯罪及び性欲はありえないと考えられていたため, 当事者はしばしば内的混乱(本作品では「狂気」と呼ばれている)に陥らないようにフランス小説を手本にし, 自己を理解可能なようにフィクション化し日記に記した。

- (19) Mary S. Hartman, "Murder for Respectability: the Case of Madeleine Smith" *Victorian Studies* 16 (1973): 381-400. Hartman は興味深い事例を紹介している。

M. Smith は立派な淑女だが, 女学校を出たばかりで, 性的好奇心が強く, 労働者階級の青年を誘惑し, 肉関係までもち, 密かに彼と婚約する。ところが, 上流階級の前途有望な青年との結婚話がまとまりかけると, 父親に「ふしだら」と思われることに耐えられず, 前者を毒殺した。事件は 1857 年に起こったのだが, これが興味深いのは事件そのものよりむしろその後の事の顛末である。裁判の傍聴席には有閑階級の女性が押し寄せ, 世論は殺害された青年を悪質な 'fortune hunter' と決めつけ, M. Smith には極めて同情的だった。このあたりのからくりを Hartman は次のように説明している。

The accused murderess, they saw, had acted out what they, in their most secret thoughts, had hardly dared to imagine. ……For the large numbers of women who were so absorbed in the trial, the experience may well have been less one of attending a freak show than of looking into a distorted mirror. (p.399)

つまり, 彼女が加害者から被害者に姿を変え報道されたのは, 真相を究明すれ

ば、淑女の規範即ち中産階級の価値体系そのものの矛盾が暴き出されるからである。

- (20) Showalter, *A literature of Their Own* 167.
- (21) Peter Brooks, *Reading for the Plot* (Boston: Harvard Univ. Press, 1984) 31.
- (22) Hirsch 56.
- (23) *Ibid.*
- (24) Showalter, *The Female Malady* (Penguin Books, 1985) 71-2.
- (25) エドワード・ショーター『女の体の歴史』池上千寿子／太田英樹共訳（勁草書房, 1992）。
- (26) 井野瀬久美恵『子供たちの大英帝国』（中公新書, 1992）。
- (27) Diane Elam, "White Narratology: Gender and Reference in Wilkie Collins's *The Woman in White*" *Virginal Sexuality and Textuality in Victorian Literature* ed. Lloyd Davis (New York: State University of New York Press, 1993) 49-63.
- (28) Boyle 136.